

中野区教育委員会会議録 平成25年第32回定例会

○開会日 平成25年10月25日（金）

○場 所 中野区立江原小学校

○開 会 午前 10時30分

○閉 会 午後 3時20分

○出席委員

中野区教育委員会委員長	大 島 やよい
中野区教育委員会委員	小 林 福太郎
中野区教育委員会委員	渡 邊 仁（地域での教育委員会欠席）
中野区教育委員会委員	高 木 明 郎
中野区教育委員会教育長	田 辺 裕 子

○出席した関係職員

教育委員会事務局次長	高 橋 信 一
副参事（子ども教育経営担当・知的資産担当）	
	辻 本 将 紀
副参事（学校再編担当）	石 濱 良 行
副参事（学校教育担当）	伊 東 知 秀
指導室長	川 島 隆 宏
副参事（学校・地域連携担当）	濱 口 求
副参事（特別支援教育等連携担当）	黒 田 玲 子
副参事（就学前教育連携担当）	古 川 康 司
副参事（子ども教育施設担当）	伊 藤 正 秀

○担当書記

子ども教育経営分野	片 岡 和 則
子ども教育経営分野	仲 谷 陽 兵

○会議録署名委員

委員長	大 島 やよい
委 員	小 林 福太郎

○傍聴者数 17人

○議事日程

[協議事項]

(1) 中野区立小中学校の連携教育について（指導室長）

[報告事項]

(1) 委員長、委員、教育長報告事項

[その他事案]

(1) 江原小学校訪問

中野区 教育委員会
第 3 2 回定例会
(平成 2 5 年 1 0 月 2 5 日)

午前10時30分開会

大島委員長

おはようございます。

教育委員会第32回定例会を開会します。

本日の委員の出席状況は全員出席ですが、午後に予定されている地域での教育委員会での会議につきましては、渡邊委員が所用により欠席です。

本日の会議録署名委員は、小林委員にお願いいたします。

本日の議事日程は、お手元に配付の議事日程表のとおりですが、このあと、会議を一たん休憩して、午前中に江原小学校訪問を行い、午後に会議を再開して、江原小学校を会場として地域での教育委員会を開催し、付議案件についての協議等を行いたいと思いますが、ご異議ありませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

ご異議ございませんので、そのように日程の順序を変更いたします。

それでは、これから江原小学校訪問を行いますので、ここで定例会を休憩します。

午前10時32分休憩

午後1時45分再開

大島委員長

それでは、定例会を再開いたします。

皆さんこんにちは。ただいまから地域での教育委員会を開催いたします。

本日の地域での教育委員会は、中野区において開かれた教育行政を一層推進するために、年2回程度区民活動センターなど、区役所以外の場所に会場を移して開催をしているもので、本日で24回目の開催となります。

本日は、午前中に江原小学校を訪問しまして、3校時、4校時の授業視察を行ったところですが、引き続きこの江原小学校を会場として地域での教育委員会を開催し、付議案件の協議等を行ってまいりたいと思います。

会議の進行につきましては通常の教育委員会と同じように進めてまいりますが、本日の協議事項、「中野区立小中学校の連携教育について」の協議の途中で会議を一たん休憩し、協議テーマに関して傍聴の方のご意見をいただく時間を設けたいと思います。その後、会議を再開し、いただいたご意見も参考にしながら引き続き協議を深めてまいりたいと思いますので、よろしくをお願いいたします。

それでは、日程に入ります。

<協議事項>

大島委員長

協議事項「中野区立小中学校の連携教育について」の協議を行います。

事務局から説明をお願いします。

指導室長

皆さんこんにちは。きょうは私のほうから、現在中野区で進めている小中連携教育についてご説明をしたいと思います。

皆さんのお手元に、資料を2種類配付をさせていただいております。

1枚はA3版で、大きく、表側が「中野区における小中連携教育のあり方」で、裏面が、全体でこれは7年計画になっているのですが、タイムスケジュールを示したものがあるかと思えます。

また、きょうパワーポイントで作成した画面をこちらのテレビのほうに映しますが、その画面と同じ物がお手元にいつているかと思えますので、できればこちらのほうを見ていただきながらお話を聞いていただきたいなと思えます。

この小中連携教育につきましては、今年度、平成25年度からスタートしたわけなのですが、昨年度もこんなことを計画しているということで、地域の方又はPTAの联合会でもご説明を何回かしていますので、一部重なる内容がありますが、初めてこの話を聞かれる方もいらっしゃるということで、そのあたり少し重複をしますが、ご容赦いただければと思っています。

昨日の新聞だったでしょうか、小中一貫校の数がふえているというものが、幾つかの新聞で取り上げられていました。たしか、日本全国で100校ぐらい一貫校というのがあると新聞では伝えられていたようです。

中野区で進めるのは一貫校ではなくて、小学校、中学校が連携をして、その効果的な取組を進めていこうというものをことしからスタートしているものであります。

早速、中身のほうに入っていきたいと思えます。

まず、小中連携教育が必要な理由というところで、大きく二つあるかと思えます。

よく言われる、中学校1年生になったときに、小学校までの授業の仕方だとか生活が大きく変わるということで、「中1ギャップ」と言われる幾つかの問題点が出てくるところが一つあります。画面にも書いてありますが、教科で先生がかわっていくという教科担任制

も新しく入りますし、また定期テストと言って、一定期間勉強をしないと、なかなか小学校みたいに単元が終わった後にテストをするという形ではないので、そのあたり自分をコントロールしていかなければいけないとか、幾つか変わる部分があって、子どもたちは不安感だとか、一部問題行動が出てくるといことが、これは中野区だけではなくて日本全国的に言われていることです。

もう一つ、「学力調査」の結果を見ていきますと、中学生になると、少し結果が悪くなるというようなどころがあります。学力調査を細かく見ていきますと、無回答というのがあるのです。無回答というのは、もう解かない、この問題は難しそうだからやめてしまおうと諦めてしまう。簡単な問題は解いていくのですけれども、難しいところになると諦めてしまうようなどころがある。全体の割合を見ていくと、フタコブラクダと言いまして、本当は標準偏差という、真ん中が一番数多くて、正答率が高いものが減っていく、または正答率が低いものが減っていくという形なのですが、最近の傾向として、フタコブラクダと言って、比較的正答率が高い層と、それから低い層の数がかなり多くなって、真ん中が減ってきているというようなそんな傾向があると。その辺の課題を解決するために、この小中連携教育も取り組む意味があると考えております。

その裏返しという形になりますが、ねらいというのは、まず一つ目は、中学校に入ったときに、さまざま子どもたちが抱く不安をまず解消していこうというのが、この一番上に書いてあるところ。不安の要素というのは、先ほど申し上げました、一つは勉強です。内容が難しくなるとか、先生がかわっていくというようなどころがあるかと思います。

もう一つは、部活。先輩との関係をどうしていこうかというあたりも、子どもたちのアンケートなどを見ると、期待の裏返しで不安な部分もあるようです。

それから、二つ目のねらいとして、左下に小中学校の接続をなだらかにするというところを挙げてあります。

例えば、中学校になると教科担任制で、教科ごとに先生がかわると。子どもたちの発達段階を考えたときに、今までは6・3・3制で日本の教育システムはできているのですけれども、小学校の高学年、特に6年生ぐらいは、中学校と同じような対応をすることも可能だろうというようなことで、東京都は4・4・4制などというのを検討しているという話もあります。そのあたりで、例えば小学校の一部の教科で教科担任制をすることも可能です。そのあたりで、例えば3クラスあると、1組の先生は国語を教える、2組の先生は社会科を教える、3組の先生は理科を教えると。算数は現在習熟度別という形になってい

るので、新しい先生が入ることで、主要4教科を固めることができるとか、そんなことも取組の将来像としては考えているところです。

それから、今マイナス面のところを少しお話をしたのですが、三つ目として右下に、中学校への憧れを持たせるというところで、人間のエネルギーは、夢があるときだとか、目標がはっきりしているときに出てくるというものだというふうに思います。中学校に行ったときに、もちろん不安もあるのですけれども、こんなことをやりたい。中学校に行ってこれをやりたい。又は、中学校の先輩で、ああいうすてきな人がいて、あの先輩のように自分はなっていきたいというような、そういうエネルギーを持たせることも教育にはとても必要だろうと思っていますので、この三つの柱を中心に連携教育を考えていきたいと思っています。

中野区では、ことしから小中連携教育をスタートというお話をしましたが、これまでも各中学校、小学校で幾つか取組があります。そのうちの主なもの三つだけを紹介させていただきたいと思います。

まず初めが「乗り入れ指導」というものなのですが、画面はちょうど体育の授業をしているのですが、この指導をしているのは中学校の先生です。中学校の先生が小学校に行って、これは陸上の指導なのですけれども、体育の専門家の先生ですので、その専門家の手法でアプローチをしていると。子どもたちにとっては、中学校の授業はどんなのだろうというような、わくわくドキドキ感があるというところと、中学校の先生は怖いなというイメージを持っている小学生もいるようで、そのあたりの誤解を解いていくというところもねらいとしてはあります。

実際にこの授業を受けて子どもたちの声を聞いたのですけれども、画面にあります、「楽しかった」と子どもたちはそういう言葉であわらしているのですけれども、その中をひもといていきますと、子どもたちは、例えばこれは体育だったのですが、やっぱり上手になりたいという気持ちがあるのです。やはり小学校の先生というのは国語から体育まで全部教えるのですが、その体育専門の先生にポイントを教えてもらって、上手になれたような気がしているみたいです。本当に上手になれているかどうかはまだわからないのですけれども、この1時間の授業を受けて、何となくこういうふうにやればいいのだということが自分でも確認できたような気がするというようなところで、子どもたちは充実した時間を過ごしたということでした。

一方、教員のほうの声なのですけれども、下の段に書いてありますが、まず中学校の先

生のほうとしては、小学生というのは中学生に比べて意欲的でして、一生懸命自分の指導を聞いてくれますので、好意的にとってくれているのだなということで、この子たちぜひ中学校に来て一緒に勉強したいなというようなことを感じたようです。

小学校の先生、これは担任の先生は当然近くで見ているわけなので、先ほど申し上げたように、小学校は8教科を教えるので、得意不得意がはっきり言って人間にはあるのです。そのときに、こういうふうに、例えば陸上の授業は難しいのだけれども、こういうところをポイントにすると子どもたちの反応がいいのだなということの間近で見られるというところで、ある意味教員にとっては研修にもなるということなのです。これは必ずしも小学校の先生が中学校の先生から学ぶだけではなくて、その逆もあって、小学校の丁寧な指導を中学校の先生が、ああいうふうにやると子どもたちはわからないこともわかるのだなというところも、お互いに勉強できるというところで、教育委員会、私の立場としては、この部分も、教員の研修の部分としてもこの乗り入れ指導の効果があるだろうなと思っています。

それから、少し形を変えるのですが、「リトルティーチャー」という、これは夏休みに小学校で補習授業をどの学校でもしているのですけれども、この小中連携の中では、中学生が小学生の勉強の面倒を見てあげるといいますか、どこまで、プロではありませんので、教え切ることができるかということは疑問なのですけれども、ただ、例えばこういうふうにするのだよというところで、個別について教えてあげているというところですよ。

このねらいとしては、中学生が小学生を教える、その教える過程で、自分が持っている知識だとか技能などをはっきり定着させていくというのでしょうか。自分がわかっているのと、わかるように教えるというのは非常に壁がありますので、そういうことを通じて中学生がより学んだことを自分のものにしていくという部分。それから、画面を見ていただきますと、中学校2年生か3年生ぐらい、こちらが多分3、4年生ぐらいの小さいお子さんなのですけれども、4歳の差があるのです。中学校は1年生と3年生は2歳しか離れていませんので、その学年の差、年の差というのは意外に教育的な効果というのがあるのです。ある例でお話をしますと、中学校で職場体験というのをやっています。保育園で実施をします。そうすると中学校2年生14歳が、保育園のお子さん3歳、4歳、5歳ぐらいのお子さんのお世話をするという中で、学校では非社会的、反社会的行動をとっている子どもたちが、いいお兄さん、お姉さんになって、保育園でとても活躍するという場面があるのです。それは一つの例なのですが、これも同じような効果がありまして、かなり歳の差

があるというところで、ここでちょっと格好いいところを見せてあげようというようなところも中学生には心が芽生えるようです。そうすると自己有用感と言って、自分がとても大切に注目されるのだということが、人間にとってはプラスに働くというようなところもこの効果としてはあるようです。

そのあたりが、小学校、中学校それぞれの先生からの声として挙がっているのが画面にあります。お読み取りいただければと思います。

今度は、行事といいますか、部活が結びつく例ということでお話をしたいと思います。近隣の小中学校で、ブラスバンドだとか、吹奏楽などが盛んな地域の取組の例なのですが、それぞれ各学校では練習をして、コンクールに出たりとかということがありますが、では一緒にコンサートをやりましょうというようなアイデアが浮かんだというところで、やっぱり小学校、中学校でそれぞれの曲もあるのでしょうけれども、一緒に歌を歌うとかというような場面を設定したものです。

これは、小学生から見ると、中学生の音は全然違うそうなのです。それから、行動も次の画面でお話をしますが、全然違うというところが非常に大きな効果があったと聞いています。

まず、小学校の先生の声としては、小学生は中学生の演奏の技術と団結力を見て、自分たちももっと上達したいという気持ちが高まりましたということで、冒頭申し上げた、中学生に対する憧れの部分です。やっぱり音も違う、音色も違う、それから指揮者が構えた瞬間の中学生のぱっと集中するところが、やはり小学生から見ると、「ああ、すごく格好いい」というふうに見えたというような話も伝わってきています。そこから中学校に行ったら、自分も例えば吹奏楽クラブに入って、あの楽器を、あんな音を出してみたい、そのために一生懸命練習しなければいけないのだというようなところの意欲につながってほしいというような取組の例です。

今お話しした三つの例は、平成24年度までもいろいろな地区の学校で行われてきました。平成25年度からは、これまで培ってきたそういうさまざまな取組を集約をして、オール中野として、一つの方向性を持って小中の連携教育をしていこうと。ただ、全体を全て、例えば江原小学校でも、それから南の新山小学校でもという形で、全部を縛ると、実際運営するのはなかなか難しいというところで、大まかな線というのを示すというようなものです。そこで丸に幾つか取組例を書いてあるのですが、例えば真ん中の一番上、これはことし、本年度やっているのですが、小学生が中学校の見学や体験ができるオープンキャンパ

スをやる。これは平成25年度の一つの柱になっています。それから右側のところに行きますと、小学校教員が中学生向けの補習の学習の手伝いをするというのがあります。それから、その右下ですが、中学校教員の小学校での乗り入れ授業、先ほどお話をしたものという形で、そこに書いてあるものを一度にやることはなかなか難しいので、年次計画を立てて徐々にふやしていく。

それから、各学校で先ほど申し上げたような独自の取組がありますので、それはそれで尊重していくという形で、最終的にそれを決定していくのは、例えば本校であれば、江原小学校と江古田小学校と第七中学校が一つのグループをつくっていますので、その校長先生方で相談をしていって、この中学校区の特徴を出していくというような形の取組を考えています。

スケジュールの話に入りますが、A3のお配りをしたプリントの裏面が、おおむね7年ぐらいの計画というところで示したものです。表頭のところに、おおむね2年を移行期、次の2年間を充実期、そして最後3年間を発展期ということで、これを平成25年度から始めていくと、発展期の最後は平成31年度ぐらいになるのです。そのぐらいの先を見た形で進めていきたいなと思っています。

ちょっとまた画面のほうを見ていただきたいのですが、まず移行期のほうは今お話ししたように、現在の中学校の学区域の状況の中で、オープンキャンパスという、小学生が中学校に行って授業だとか部活だとかを体験していく、又は学校の説明を生徒会にしてもらうとかという、そういうようなものを中心に、まず土台を2年間につくっていきこうと。土台で一番大切なのは、教員間、小学校の先生と中学校の先生がちゃんとお互いを理解するということがとても大切なので、後ほどお話をします。

それから、次の2年間、充実期というところで、その表の中にも出てきますが、例えば「中野区検定」というようなものを独自につくって行って、それを子どもの目標にするというような取組ですとか、「中野の100冊」というような読書活動をオール中野で取り組んでいくようなものなど、子どもたちの目標となるような取組を中心につなげていく。

発展期のほうは、連携をした教育課程ということで、一貫教育というのは、全ての教育カリキュラムをつくって決めていくのですけれども、中野区の場合は連携ですので、可能な部分について教育課程を合同でやっていくというような、例えば行事を合同で実施するとか、そんなものにつなげていきたいなと。先ほど申し上げた小学校の教科担任制も、この発展期では可能にしていきたいなと考えています。

今年度何をしているかというところでお話をしたいと思いますが、平成25年度は、まずオープンキャンパスという話を今しました。もう第1回目、第2回目が終了をしています。第1回目は5月の連休明けぐらいから、5月の終わりぐらいまでで、各中学校区で、これは授業の見学。中学校に小学生が行って授業を見学する、又は部活の様子を見学するところを軸に始めました。

第2回目が8月30日という日にちを原則ということで、これは今度は授業を体験する。中学校に行つて中学校の先生の授業を受ける、又は部活に参加するというようなものを行いました。ただ、この日はとても暑い日で、気温が36度ぐらいありましたので、運動部はなかなか予定したような時間だとか内容にならなかったというところで、これはちょっと反省事項として残っています。ことしの猛暑がちょっとマイナスに働いた部分がありました。

3回目は2月15日、第2土曜日になると思いますが、進学希望校に行つて、説明会などを中心に、直前というところで、子どもたちが中学校に行つて体験をするというようなものを考えています。これが大きな柱です。

それから、左下に小中連携モデル校という記載があるかと思います。第七中学校、それから江原小学校、江古田小学校の3校が、ことし研究指定ということで、中野区のリーダーシップをとっていただくと言いますか、先行した研究、取組を行っているということで、ここでの取組がほかの学校の今後の参考になるという形で、ことし、来年にかけて、2年間研究を行つてもらっています。

それから、右下のところは、これは学校の内部の話なのですが、連携教育をやるといっても、きちんと組織、職員を決めていかないとなかなか物事は進まないで、そのあたりをきちんと組織の中に位置づけて、ことしスタートしたというところでもあります。

先ほど申し上げた、第1回目のオープンキャンパスを5月にやったときは、見学が中心ですので、教室の中で中学生が授業をしている様子を見るですとか、それから廊下からのぞくような形もあったようです。ここで感想として子どもたちから出てきていたのは、生徒会の子どもたちが、これは体育館の会場なのですが、「うちの中学校はこういう中学校です、こんな特徴があります」ということを話したようです。中学生、自分たちの数年先の子どもたちの説明ということで、とてもよく小学生は聞いていたようです。

余談になりますが、私も小学校の校長をしていたのですが、朝会のときに、毎朝月曜日に話をするのです。私のいた学校では、その後6年生が順番に必ず2、3分のテー

マを自分で決めて話をするのです。そのときに、私の話の聞き方よりも、6年生の話のほうが、時々一生懸命聞いてくれることがあるのです。そうすると、校長の仕事として一生懸命毎回考えて話をするのですが、それよりも6年生の話のほうを、こうやって子どもたちが食い入るように聞いていると、とてもショックを覚えるのです。このときも、それと同じということではないのですが、中学生が自分の学校についてこうですよというところを説明したときの反応がとてもよかったというような話もありますので、校長先生が話をするのも悪いというわけではないのですけれども、そういうような効果もあるようです。

第2回目のほうは、授業を参観したというところで、中学校の先生が授業をします。私も何校かちょっとこの様子を見に行っただけなのですが、やはり小学生にわからせるためには、中学校バージョンの教え方だと子どもはつまらなそうにしているのです。同じ教科を複数見たときに、やっぱりそれなりに熟練した先生は、子どもの目線におりていくというところまで、小学生もとても目を輝かせて授業を受けていたという場面を見ました。先ほど小学校の先生が中学校の先生の専門性から学ぶというお話をしたのですが、逆のパターンとしてもあるというお話をしたのですが、例えばそういう子どもの目線に立って、わからない子を少なくするための手練手管、どうしても小学校は現物を持ってきたりとかいろいろなことをするのですけれども、その辺で中学校の先生も学ぶ部分もあるのかなというふうに感じたところがありました。

その他で、オープンキャンパス以外にほかに何をやっているのでしょうかというところで、先ほどのこれまでの実践例以外にも、そこに三つほど掲げさせていただきました。丸の中にも入っていましたが、夏休みに小学校の先生が中学校に行って、これはどうも中学校1年生のお子さんを対象にして取り組んだようだけれども、補習の指導に当たったと。ある意味自分たちが送り出した子どもが、どのくらい身につけていたかというのが手にとるようにはっきりわかるわけですから、そこでやっぱりわかっていなかったなということであれば、やっぱり小学校の教え方を少し改善しなければいけないかなというところも感じたというような話も聞いています。

それから二つ目が、地域清掃だとか、いろいろな形でどの学校もボランティア活動に取り組んでいるところがあるのですが、ではその同じ校区で一緒にやろうではないか。そうすると先ほど申し上げた中学校3年生から小学校低学年ぐらいまでの異年齢集団もつくることのできるのです、そんな形で先ほど自己有用感の話をしたのですけれども、そんなような取組にもつながる例かなと思っています。

それから3点目、これはまだ季節がっていないのでこれからの予定ということなのですが、体力づくりの一貫として、駅伝大会などを合同でやるというようなことに取り組んでいる中学校区もありますので、少し紹介をさせていただきました。

課題があります。最初からある程度予測できる課題と、それから走ってみて見えてくる課題とあるのですが、ここでは3点ほど出させていただきました。

一つ目が、現在の学区域の話なのですけれども、一つの中学校で2校から、一番多いところは4校小学校がかかわるところがあるのですが、必ずしも一致をしていない。この第七中学校区は江原小学校と江古田小学校と第七中学校で、これは完全形なのです。完全形があるのは、たしかここともう1か所だけなので、その辺は直していかないといけないところがありますので、学校再編計画に伴って、小中連携がやりやすいような区域にしていくというのが一つ課題としてあります。

それから、二つ目が先ほど途中で申し上げました、小学校と中学校で文化が違って、同じ先生なのですけれども、教育観とか指導観だとかが少し違うのです。そのあたりがいろいろ、今回小学校、中学校の連携を進めていく中で、はっきり見えてきている部分があります。小学校側から見ると、中学校の先生のここがちょっと課題なのではないか。逆に中学校の先生から見ると、小学校がここをやってくれないから中学校になって困るのだとか、そんな声が幾つか出ていますので、それが移行期を2年間とったというのは、その辺を固めていって、本音が出てこないと物事がその先に進みませんので、本音を出し合う中で連携教育を進めていきたいなと思っています。

三つ目が、一つの学校で物事を進めるのも、当然相談だとか共通理解をしないとイケなのですけれども、2校ないし3校又は4校ぐらいやっていると、それなりに手間と時間がかかってきます。ただ、私たちに与えられているのは、24時間しかありませんので、どこかで効率的な工夫をしていかなければいけないというところで、学校に校務支援システムと言って、コンピューターのいろいろなシステム、これを入れることで、例えば通知表をつくる時の時間が7割から8割ぐらいで済むとか、そういうようなものを教育委員会としては導入をして、教育活動に先生たちが時間を使えるような、そんなバックアップをしていくことを今現在進めているところです。

まだ平成25年度が終わっていない中での途中の報告ですので、これまでのねらいですとか、考え方、それから現在進めている状況と、今度詰めていかなければいけない課題の部分についてお話をさせていただきました。

私のほうからの報告は以上でございます。

大島委員長

それでは、ただいまの説明に関して、各委員からご質問、ご発言がありましたらお願いします。

小林委員

指導室長から大変丁寧な説明がありました。もう既にそのときに説明があったのかもしれませんが、実際に子どもたちの声とか、教員の声とか、保護者の声とか、そういうことをもし把握されている部分がありましたら、もう一度確認をしたいと思いますが、よろしくお願いします。

指導室長

大体それぞれの過程での声というのはご紹介をしたところなのですが、それ以外の声として上がっているところでは、最後、課題のところでもお話をしたのですが、現在学区域が整合していないというところが、必ずしも自分の進学する学校が、連携している中学校になっていないところも多々ありますので、一番理想は、自分が進学する学校の授業を見たりだとか先生の教え方を体験するところなのですが、それがちょっとできていないというところがあります。ただ、これについては、この案を提案したときの小中学校の校長先生から同じような意見をいただいたのですが、それについては、小学校と中学校が連携をしていく。子どもたちにとっては中学校というのはどういうものか、中学校の生活の不安をとっていくというところをねらいにしていますので、そのためにこの形で進めさせていただくというような説明をさせていただいていますが、そんな声が出ています。

まだ保護者のほうには、各学校のほうではアンケートをとっていただいていると思いますが、まだ教育委員会では集約をしていませんので、今後学校評価のあたりで上がってくる意見などを伺っていきたいなと思っています。

大島委員長

そのほかにいかがでしょうか。

高木委員

本区においては、いわゆる小中連携というのはもう大分進んでいて、いろいろな組み合わせで大分実績ができていのかと思います。ちょうど今、秋ということで、各中学校では、なかのZEROを使って合唱コンクールをやっていると思うのですが、私の今次男が緑野小学校に行っておりまして、実はきのうメールが来まして、けさ、きょう9時に緑

野中学校の合唱コンクールで1位をとったチームが、緑野小学校に来て子どもたちの前で模範で合唱、合奏をやってくれるということなのです。もうちょっと早く言ってくれば教育委員会に来る前にちょっと行って見たのですけれども、そういう連携を各学校同士の組み合わせで非常に活発にやっていたと思っています。ただ、今回小中連携教育ということで、いわゆる行事ですとか、体験ですとか、あるいは中学校区をユニットにして、いろいろな情報ですとか人材の共有というところから一つ踏み出しをして、子どもたちの教育という点で連携していこうという、非常にやり方は難しいと思うのです。私は中1ギャップ、中1ギャップという話がありますが、ギャップは必要だと思っています。ギャップがないということは成長がないということなので。ただ、やはりなかなかそのギャップを越えられない子どもがいたときに、段差を低くするのとか、そうではなくてやはり段差を越えられる力をつけてあげるのが教育だと私は思っています。そのときに、越え方がやはり今の指導室長の説明ですと、小学校と中学校では段差がこれぐらい違うと。そうするとそこは共通の理解をして進めていくというのが非常に重要だと思っています。

今回、この七中校区で江原小学校と江古田小学校、南部のほうでもう1組み合わせありますね。小中学校の再編をしたときに、少子化という面も非常に大きかったのですが、やはり我々の問題意識としては、中学校区をユニットにして、いろいろな形で、区民の方が自分の地元の学校に安心して通えるような教育体制にしたいというのが非常に大きな問題意識でしたし、また、中学校や小学校のPTAの方からもそういう話がありましたので、そういったことを強く念頭に置いて今回学校再編を進めたところでございます。ただ、なかなか実際には、再編が進んでいってもすぐに100%にはなりません、段々にこれは終息していくのかなと思っています。

感想みたいな形になってしまいましたが、以上です。

大島委員長

それではほかに。

教育長

今、高木委員のほうから昨年度策定をいたしました学校再編計画第2次の際の教育委員会の議論で、学校区を整合をどうやっていこうというお話がありましたけれども、小中連携はそれだけでなく、さまざまな意味があるかなと私は思っているのですけれども、中野区の場合はとても地域が学校を支えてくれるという大きな力があります。また、先ほども少子化の話がありましたけれども、やはり家族も、地域の中でいろいろな人とかわつ

て家族が生活をしていくということがなかなか難しく、地域の方が学校を支えてくれることだけでなく、地域の子どもとしてさまざま、いろいろな方々が一人一人の子どもにかかわっていただくということも、区の行政としても仕組みをつくっていく必要もあるかなと思っているのです。そのときに、それぞれの学校、小学校なら小学校を支えてくれる力が、同じように同じ地域ですので、多分中学校も地域の方々が応援してくれる。その中で、やはり1人のお子さんがずっと成長していく中で、地域の方がずっといつまでも成長するごとに子どもたちを見守ってくれたり、応援してくれるという姿も地域の中で生み出していきたいなと思っていて、そういう意味でも学校がつながっていることによって、地域の方々がそれぞれのお子さんにも着目をして、支援していただける、そういう力になるのもいいのかなと思っています。3年前から中野区では「子ども教育部」ということで、子ども施策も教育と一緒に仕事をしていますので、その力を今お話ししたような取組にも注いでいきたいと思っています。

これは申しわけございません、感想なのですけれども、もう1点は、ことしから始まったということで、子どもたちが、小学生が中学校に行ったり、中学生が小学校に行ったりという、あるいは先生たちがそれぞれの学校に行くという、初めて足を踏み入れたというところでは意義が深いのですけれども、実質的にこれから、本当に真剣に取り組んでいかなければいけない時期に、これからなっていくのだと思うのです。中学校で学力が、小学校で習ってきたことの成果がなかなか得にくいという状況がある中で、来年度以降、乗り入れ指導とか、チームティーチングなどで、小中の教員が連携してやっていかなければいけないということで、具体的にこれから教育委員会として検討していくわけですが、その体制というのを指導室長、説明をしていただけるとありがたいのですが。

指導室長

乗り入れ指導を活性化させていくというところで、今は中学校の生活を体験するというような、中1ギャップに対する対応ということで乗り入れ指導をしています。最後の完成と言いますか、教育課程に踏み込むというのを最後の3年間で仕上げていきたいなと思っているのですが、実際の授業の例えばある単元を決める。例えば小学校の算数であれば、図形の領域については小中が協力をした授業をしていく。そのためには、小学校の図形の指導が中学校にどういうふうにつながっていくかというところをきちんと見据える必要があるのです。そのためには、小学校、中学校それぞれ教員の研究会というのがあって、指導法について研究しているわけですが、その指導法が一貫するようなどころまで踏

み込んでいくと、小学校でこういうふうに教えていて、それが中学校になると全然違う教え方だと子どもが混乱しますので、関連できるような指導にしていくとか、その辺をおおむね2年間の充実期の小教研・中教研の合同開催というようなあたりで、教員の指導観を一致をさせていうというところにも迫っていきたいなというふうに。最終的には教育、カリキュラムの一部分をそれぞれ共通のものにしていくというようなことを考えています。

大島委員長

ほかによろしいですか。

小林委員

今いろいろなお話があって、確かに小中連携教育の教育的な効果というのは、さまざまこれから可能性が広がっていくのではないかなと思いました。

一方で、先生方が乗り入れ授業をするとか、今までと違うことをやるということで、これまでに増して多忙感とか、そういうことも出てくるかもしれません。ただやはり、子どもたちに視点を当てたときに今何が求められているかということを考えると、今後小中連携教育は、ぜひ進めていきたいなというふうに強く思うわけです。

ただ、今お話ししたような状況を考えると、私は、ここにも三つの柱とあるわけですが、小中連携をやって効果が高まるということは、学力の面だとか、不登校などの課題の解決だとか、それから人間関係を豊かにするとか、さまざまなことがあると思うのですが、私はそのあたりを、学校を関係する小中学校ごとに、どこにポイントを置くのか。要するに、うちのブロックでは学力という面を一番の主題にして連携を進めていくのだとか、うちは人間関係というのを主軸に置いてやっていくのだとかという、そういったそれぞれの特色を一方では認めていくことも大事なかなと思います。ただ、それを認めたからほかをやらなくていいよという話ではないです。やっぱり区として一定の線は、これからは出していく必要があると思います。

なぜ私が改めてそういうお話をしたかということ、きょうは午前中、江原小学校の子どもたちの様子を拝見しました。これは決してお世辞ではなくて、非常に本校の子どもたちは一生懸命に授業に取り組んでいたし、いい雰囲気だったと思います。ちょうど11月8日、9日が学芸会ということで、その練習を一生懸命やっていました。5年生のあるクラスで非常に感心したのは、踊りというか、歌というか、一生懸命やって、そして何人かが審査員になって、とてもよかった子を指名するのです。そのときの子どもたちの様子というのが、本当に満面の笑みを浮かべて、体を、全身で表現して、一生懸命にやるというのでしょ

うか、その爽やかさというのですか。私はそれを見ながら、別にこれは中学校が悪いとかいいとかではなくて、発達段階から言って、この子たちが今度は中学校に行ったときに、だんだん照れとか、恥ずかしさとか、それは当然今の5年生の発達段階と心理状況と、中学生の心理状況は違いますから、同じようにやれといってもそれはできなくなるわけです。ただ、私はそういうときに、中学生たちに、この笑顔を思い出させたいな、見せたいな、自分たちもこういう時代があったなとか。それは、先ほど教育長がおっしゃったように、今子どもの状況が変わってきて、少子化だとか核家族化だとか。かつては一緒にいた、一緒に生活していた部分が多かったのですけれども今はそれが、そういう場面がないわけです。逆に言うと、かつてのよさを補完する、教育現場で補完していくという、そういうよさも私はあると思うのです。ですから、かといって全てをやるということのも大変ですし、それは中野区でも、その地域によってさまざま課題も違うと思うし、子どもたちの様子も違いますから、どういった部分を、学力なのかとか、人間関係だとか、課題解決するのだとかいろいろあると思いますので、そういう部分を今後十分押さえながら、でも子どもたちのためにこの教育を進めていくということが大事なかと、きょうは非常に強く感じました。

大島委員長

では、ほかによろしいでしょうか。

では、私もちょっと感想ということではないのですけれども、私が教育委員になった約6年前、それからまもなくして小中連携をどうしようかというようなことが俎上にのぼりまして、それから随分長い時間協議をしまいいりまして、教育委員で、品川の小中施設一体型の学校の見学にもまいりまして、そのときたまたま校長先生だったのが小林委員というようなご縁もあるわけですが、そういう視察をしたり、いろいろ研究者の方からお話を聞いたり、やっことしから移行期ということになり始めるということになったので、そういう意味では本当に感無量というような感じもいたします。

個人的なことで、私ごとで恐縮なのですが、自分自身の体験ということでは、もう小学生から中学生になった何十年も昔のことなのですが、私は世田谷の小学校を卒業しまして、それで中野五中に入ったということで、全く断絶というか、友達も誰もいない中学校に入りました。もちろん様子も何も全くわからなくて、その上、五中は不良が多いという噂がすごく飛び交ってしまっていて、非常に怖くて、中学はどんなものか全く知らないし、鉛筆はもう使わないのだという、これも噂が出てしまっていて、万年筆で全部書くのだとかいって、字を間違ったらどうするのだろうとか、そんな誤解もしていたようなところで、

いきなり入りました。当時あまり感受性も強くなかったのか、ぼやっとしていた生徒だったのか、そのことで悩んだという記憶もなく、何となく学校になじんでいったような感じでしたので、私自身は特に苦勞したという記憶がないのです。でも、ある意味そういう小学校、中学校の全く違う段階をステップアップした世界に飛び込むというのも、おもしろい経験だったとは思いますが、だからと言って、では何の手当もしないでほっておいて、ただどこかの中学校にいきなり入るということでもいいのかと考えますと、小林委員とか、指導室長の意見にもあるように、今はそれでは済まないし、もっと教育的な配慮をすることが必要だということは私ももちろん感じまして、それで小中連携というものがどうあるべきかというようなことを協議してきたのですけれども、ある意味隔世の感を感じたりしております。

それではほかによろしいですか。

それでは、会議の途中なのですけれども、ただいまの協議事項のテーマに関しまして、傍聴の方からのご意見をお伺いしたいと思ひまして、ここで一たん会議を休憩して、傍聴者発言の時間を設けたいと思ひます。

では、定例会を休憩いたします。

午後 2 時 3 5 分休憩

午後 2 時 5 5 分再開

<定例会再開>

大島委員長

それでは、定例会を再開します。

引き続き、各委員から質問やご発言等ありましたらお願いしたいと思ひます。

高木委員

今、いろいろ傍聴者の方から貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。

感想やご意見の中から、学校区の移動、いわゆる越境的なところですか、あるいは学校選択制についてのご発言があったかと思ひます。一応、この教育委員の中で一番私が現在では古株になりましたので、私もただ、学校選択制の議論をしたというのは、私が教育委員になる前のことなので、リアルタイムでは実は存じておりません。ただ、学校再編計画第 2 次を策定するときに、当然その議論が、こういう議論があったねという話はいま

した。教育委員会としましては、当初学校選択制のお話もありましたが、学校再編が完了するまではこれは手をつけないということで、当時は棚上げになったというふうに私は記憶をしております。第2次の策定に当たっては、基本的に我々の議論の中では、校区の指定は引き続きやっていくと。地域の方から安心して通える学区を維持していくということが、現在の第2次の計画の基本的な考え方でございます。もちろん例えばいろいろなご事情で、健康上の事情とか、そういう諸般の事情で指定校変更ということはございますが、基本的には、教育委員会が指定した小学校、そこからなるべく整合性を持った中学校に行っていただくと。それを学校と地域と保護者あるいは区、こういったものが子どもたちを育てていくというのが基本の考え方でございます。そういうふうにご理解いただければと思います。

あと、ご発言の中で、蝶名林先生から、三つのポイントで「学習、生活、キャリア」というのを聞いたときに、私ははっとしました。文部科学省がキャリア教育と言い出したのはつい最近でございますが、キャリア教育は非常に大切という認識を私はしております。私どもの短期大学でも、以前は入って大学や短大で勉強をして、勝手に就職活動をして卒業をしていけという形だったのですが、この10年ぐらい前からキャリア教育が非常に重要になっておまして、私どもの短大でも、必修でキャリアデザインという授業と、キャリアと職業という授業がございます。やはり私どもですと、中等教育からの申し送りになってくるのですが、なかなかやはり中等教育レベルではばらばらな形なので、入ってからの学生の意識に差があるところなのです。そのベースのところでは小学校と中学校で連携をしまして、必ずしも職業教育ではなくてもいいと思うのです。おっしゃる人間関係力ということで、学習面あるいは体力だけではなくて、もちろん、もしかすると心の教育の一部になると思うのですが、どうやって社会の中で生きていくのか、そういったところを考えていくということは非常に重要な視点だと思いますので、ここで非常に今、教えていただいたなというところでございます。

今回お配りした資料のほうでも、A3の大きなほうですが、具体的な取組例とタイムスケジュール（予定）と、実は結構幅がある表現になっているのですね。これだけ詰まっているのを見ると、確かに「ああ、これもやらなくてはな、あれもやらなくてはな」ということなのですが、あくまで取組例とタイムスケジュール（予定）でございますので、この進め方に当たっては、全区的にやっていくベースの部分と、小林委員からもご発言がありましたように、この地域ではこれを中心にやっていくのだ、あるいは本校ではこれをやっ

ていくのだという部分がある程度あっていいと思います。そういったところで、中野区全体の教育の向上とともに、個性がある学校というものを目指してこの小中連携教育を進めていかないと、ご発言の中でやはり教員の多忙感ですとか、いろいろなことというのがありました。そういったことも踏まえながらやっていく必要があるなと感じたところでございます。

大島委員長

ではほかに委員のご発言ありますでしょうか。

教育長

教育委員会の事務局として、この小中連携の方針というのを昨年末に出して、今年度から始めているのですけれども、そのときの議論の中でも、傍聴の方も大勢心配されておられました教員の多忙感と言いますか、それだけでなくもさまざまな今でも課題が山積をしているような状況で、また新しい社会状況も生まれてきていまして、それに対応していくということに直面しておりますので、そこを私たちとしても非常に心配をしていますし、何らかそれを解決するような方策もとっていかなければいけないと思っています。

先ほど、指導室長のほうから校務支援システムというような、電子的にですけれども、事務処理を早めていくというような取組もしていかなければいけないという話がありました。それ以外にでも、ちょっと事務的な話になりますが、今、中学校から始めていますけれども、係長級の事務職の職員を学校の中に配置をして、副校長の事務の軽減などを図っていこうということで、人的にも、教員ではありませんけれども、学校の事務処理を軽減するような取組。それから、今後乗り入れ授業とか、乗り入れ指導とか、チームティーチングなどを進めていくに当たっては、中学校の教員を小学校に派遣したときに、中学校に手が薄くなるということはあってはなりませんから、やはりそういうところに講師などを配置するとか、あるいは今でも学力向上アシスタントとあって、チームティーチングのときに補助的にかかわる職員を採用していますけれども、そうしたことを充実していくとか、やっぱり教育委員会事務局としてもできる限りの支援ということをこの連携の中ではやっていきたいと思っているところです。

大島委員長

それでは、ほかにご発言ございますでしょうか。

高木委員

ちょっと指導室長にお聞きしたいのですが、小学校の高学年で一部教科担任制を入れる

ということで、きょうの朝日新聞でも習熟度別を都として力を入れるという話もありましたが、私の感覚で言うと、複数の科目を教えるよりも、1科目を3クラス教えたほうが、ちょっとは楽かなという、教員の負担という話になります。やはり授業準備はすごく大変ですので、そこら辺を例えば、小学校で幾つかの科目、例えば3クラスあったときに、数学は習熟度別でやるとして、国語と社会と理科を教科担任にした場合に、教員の負担というのは、ちょっと難しいかもしれませんが、減るのでしょうか、ふえるのでしょうかという質問なのです。

指導室長

まず、減るかふえるかということで言えば、私も実際その交換授業という形で教科担任制をやったことがあるのですが、減ります。今高木委員がおっしゃったように、例えば同じ単元を1組から3組までであるとしたら、3回同じ授業をする形になるので、教材研究は、普通の学級担任だと1回ずつ、次、また次の教材研究となるのですが、それは分担した分だけその教科に集中する時間が長くなりますので、これは私の経験から言っても、とても教材研究は中身の濃いものになったような記憶があります。

それから、あと、例えば1学年3クラスだった場合に、基本的には学級担任がそのクラスを見ているのですけれども、教科担任制をすると、学年全体で、3人の先生で3クラスを見るということができますので、学級担任が気がつかない側面をほかの先生が発見したりだとか、そこに言葉かけがあるとか、又は、それぞれ力量の差なども当然ありますので、どこかで学級経営でつまづいたときにほかの教員が補うことだとか、そういうようなメリットは私はあるだろうなと思っています。

大島委員長

ほかにはよろしいでしょうか。

それでは、私からなのですが、連携教育の三つの柱ということで、学力、体力そして豊かな心という。この三つの柱のうち、例えばうちの学校ではこれを重点にというような、そういう学校の特色はそれぞれ出してしかるべきだということももちろんもったものですが、いずれにしても学力向上というか、つまづきをさせないでしっかり基礎学力をつけてもらうというのは、いずれにしても大事な目標にはなると思います。そのために、将来はカリキュラムの検討をして、小学校で、例えば分数とかにつまづいたとかいうようなことを、また中学でそういうものを補って、それを土台にして、その上に積み上げていく中学校での学習もスムーズにできるように、小学校で十分でなかった理解を中学校でま

た補ってあげて、中学校の学習がスムーズにできるようにと。こういうようなこともやろうとしている大事なところなので、その辺の、先生方での研究をしていただいて、カリキュラムの小中連携と言いますか、カリキュラムの中での工夫をまたしていただくと。そういうことが将来していただきたいことかなと思うのですが、その辺については指導室長、どうでしょう現状では。

指導室長

この発展期のところに年間指導計画というような言葉があるので、これは全ての教育計画を小中連携でやるという、もしかしたら印象をお持ちになるかもしれないのですが、これまでのご意見からもそれはなかなか厳しいことだということで、私たちが受けとめています。

例えば、学力調査の結果を踏まえて、自校の課題がそれぞれ見えてきて、現在授業を改善する新プランをそれに基づいてつくっていただいているのですけれども、例えば中学校区で共通するものはないか。例えば国語の読みの部分はとてもいいのだけれども、基本的な語句の部分が落ちているとか、特徴がそれぞれの学校であって、それを中学校区で比べたときに共通するものがあれば、それは一つの共通した授業を改善する新プランの中に入れて、小学校から中学校までそこに重点を置きましょう。読書の力をこうしたいというのであれば、小学校、中学校で読書活動をもう一つ工夫をしたものを取組でやりましょうと。一定期間やった結果その部分が改善されれば、また違う改善点を見つけていくというようにしていくべきかなと思いますので、そんな形で共通の取組をすることが、私は重要なのかなと考えます。

大島委員長

それでは、ほかにご発言。

小林委員

ちょっと話が先ほどのほうに戻ってしまうかもしれませんが、今教育長からもこういった改革とか、新たな取組を進めていく上での人的な支援とか配慮とか、そういったさまざま進めているというお話がございました。私も先ほどの話の中で、先生方の取組に対してこういった配慮も必要だろうと。それから傍聴者の方々からもそういった配慮が必要だというお話がございました。ただ、私が一番感じているというか、一番こういったことで押さえておかなければいけないことは、やはり何のためにこれをやるかということだと思います。先ほど蝶名林校長先生が申された、私たちは連携教育を進めるためにやるのでは

なくて、学校の、教員の実践のためにやるのだと。それに突き詰めていくと子どものため
ということです。ですから、目的はやっぱり子ども一人一人のため、子どものためにやる
のだということです。

やはり、確かに物理的に今教員の多忙感ということを言われています。ですからそれは
一定の配慮は必要なのですが、先生方はやはり子どものためだと、それは疲労感とか何と
かというよりも、皆さん本当によくやっているといます。しかしながら、そ
の目的とか方法がどうも混乱して、何のためにやるのかと。なぜ連携教育をやらなければ
いけないのか、今まででいいではないかというような迷いとか、それから目的意識や方法、
意識というものがちょっと混同しますと、実践にひずみがくると思うのです。そういう点
では、片や人的にもいろいろと配慮して手厚くしながらも、かつ中野の子どもたちのため
に何をどうしていくべきかということをしつかりと目的意識とその方法を——方法という
のはこの場合には小中連携教育ですけれども、これをしつかり見定めて、子どもたちのた
めに肅々と進めていくということが大事かなと。今、きょう傍聴の方々のお話を伺いなが
ら、改めてそれを強く感じました。

大島委員長

それではほかにはよろしいでしょうか。

教育長

今、小中連携の目的という話もありましたけれども、学力の向上と体力の向上だけでな
くて、豊かな心を育てるという3本柱でこの連携を進めているのですけれども、私は、豊
かな心を育てるということが一番基本というか基礎にあって、その上に体力とか学力があ
るのだらうなと思っています。

きょう、江原小学校午前中授業をずっと見させていただいたのですけれども、どなたか
のお話にもありましたように、本当に子どもたちが明るくて伸び伸びとしていて、規律正
しくて、私たちが声をかける前に「こんにちは」とか「おはようございます」と、子ども
たちのほうから声をかけてくれて。あとすごく感心したのは、担任の先生と子どもた
ちがとても親密に一体感を持って、すごく信頼関係の中で過ごしているなという、すばら
しい教育をされているなと思ったのです。こうした培ってきたものを大事にしながら、連
携教育の中で、だんだん子どもたちの発達とともに、心も大きく育っていけるような、そ
うした連携であってほしいなと思っていまして、この七中校区で3本柱の話をしてくださ
ったときに、そのこともきちんと受けとめて、研究をしていただいているということで、ぜ

ひ来年の研究の発表を楽しみにさせていただきたいと思います。よろしく申し上げます。

大島委員長

それでは、ほかにはよろしいでしょうか。

それでは、きょうは傍聴の方もたくさん来ていただいて、貴重な発言もいただきました。本当にいい機会だったと思っております。小中連携教育はまだ始まったばかりでございまして、これから試行錯誤を繰り返しながら徐々に本格導入のほうに向かっていくことになろうかと思えます。いろいろな点で、保護者の方たち、地域の方たちにも不安がおありになるということもわかりましたので、私たちとしても、もちろん中身についてやり方等研究するという必要ですし、また、区民の方に私たちがやろうとしていることの目的とか、内容についても理解していただけるように、そして不安を解消していただけるように説明等もしていかななくてはいけないなと感じたところでございます。

それでは、これで協議事項を終了いたします。

<報告事項>

<委員長、委員、教育長報告>

大島委員長

次に、委員長、委員、教育長報告に移ります。

私から、10月18日第31回定例会以降の主な委員の活動について報告します。

10月18日午後、子ども文教委員会委員との懇談会が行われまして、全員が出席いたしました。

一括報告事項は以上です。

これから、各委員補足等ご発言がありましたらさせていただきますが、私から、今申し上げました、子ども文教委員会という委員会に所属している議員さんたちとの懇談会が行われました。

この懇談会というのは、昔行われたことがあるらしいのですが、私が教育委員になってからは全く行われたことがないことで、私としては初めての経験でございました。議員の方たちと膝を突き合わせて話すというのも初めての経験でしたが、考えてみますと、同じ子どもを育てるということにかかわる仕事をしている区議会という立場と教育委員会、立場は違うのですけれども、同じことにかかわっている人たちが話をしたことがないというのも、考えてみると不思議とも言えるかなと改めて思ったわけです。ざっくばらんな話ことができましたので、かた苦しいことでなく、皆さんの例えばご家族構成のこととか、子ども

が中野区の学校に行っているとか、いろいろなそんな話も交えながら、小中連携のことで
すとか再編のこととか、そういう中野区の教育課題について意見交換ができて、大変
有意義だったと思っております。

では、小林委員お願いします。

小林委員

私も18日、子ども文教委員会委員との懇談会に出席をさせていただきました。今の委員
長のお話のとおり、このところこういった会が開かれていなかったということで、私も初
めての体験でしたけれども、それぞれやはり議員の方々も中野区の子どもたちのために熱
い思いを語っていらっしゃいました。

その中で、それぞれ立場は違うけれども、車の両輪のように、しっかりとそれぞれの立
場で言うべきことは言う、さらには協力すべきところは協力する、そして子どもたちのた
めというような、そんなお話がありました。そういう点で具体的に何を決めたとか、こ
ういうことがあったというよりも、こうした会をまず持てたということが大変意味深いこ
とだと思っておりますし、今後さらに中野の子どもたちのためにプラスになるものをさらに
目指していくことが大事かなと痛感いたしました。

以上です。

高木委員

私も18日、子ども文教委員会委員の方との懇談会に出席させていただきました。

以上です。

大島委員長

教育長。

教育長

私も子ども文教委員会の委員さんとの懇談会に出席しましたが、終了した後、高橋委員
長からお話がありまして、教育委員さんたちの人柄がすごく非常によくわかって、また非
常に熱心にいろいろなことに取り組んでいただいている姿を見て、これからも時々いろい
ろな課題でお話をさせていただければということをお話を伺っております。

以上です。

大島委員長

それでは、今の各委員の報告につきましての補足、質問等はよろしいでしょうか。

事務局からの報告事項はございますか。

副参事（子ども教育経営担当）

ございません。

大島委員長

では、以上で本日の日程は全て終了いたしました。

ここで、傍聴の方に11月の教育委員会定例会の開会予定についてお知らせいたします。

11月の教育委員会定例会の開会予定は、議事日程表の裏面に記載のとおりです。後ほどお読み取りください。

これをもちまして、教育委員会第32会定例会を閉じます。

午後3時20分閉会